さて此の殘卷百七十行に記さるゝ所は、その解し得る所だけを拾ひ合せて考へて見ると、舊新兩約書中の記事を基として教理を說いたもので、先づ神は風の如くにして、人の見得べからざるものなるを說くに始まり、然も善福善緣の衆生のみ之を見るを得とし、ついで福を脩するものは天道を得、惡業の衆は惡道に墮落して天道を得ざることゝ。諸惡に事へて福を得んとするの誤れること。天尊の法を怕れて好（善）事を行ひ、また人を諫めて好事を作さしむるものは、卽ち天尊の教を受くるものなること。天尊を怕るゝものは、また聖上を怕れ、また父母を怕れて各之に事ふべく、此の三事は一種なること。天尊の說ける十願のこと。天尊その教に背くものを憐愍して、メシヤを降誕せしめしこと。メシヤの出生、事績、贖罪等のことを述べた所で切斷して終となつて居る、今先づ殘卷について考へて見たいことは、此の經はある原典の譯述であるか、或は、ある景士の唐に於ける論述であるかの疑問である。蒙度讃の末の尊經の記事に依つても、景典原本の唐に將來せられたものも少からず、また其の中に新舊約書以外の多くの教理論の存在したことも明かであるから、此の經もそれらの一つの譯述では無いかと考へて見なければならぬであらうが、然も此の中には、基督教の一派なる景教の所說としては、甚だ如何はしい點が隨處に見え、そうして此等の點は、特に支那に於る特種の事情に順應する爲に說かれたものと認むべき節が多い。果して然りとすれば、之を以て單なる譯述とは見ないで、當時唐に在つた景士が、その教義を宣傳する爲に、唐の國情に鑑みて、本來の教義の上に多くの潤色を加へた、極めて調和的な教論と見なければならぬものと思はれる。然らば何れの點に於てかゝる特徵を認め得るかといふと、第一には佛教について屢關說して居ること、次には儒教の思想中、君父に對する忠孝の觀念に對して、著しく調和的の態度を取つて居ることである。景教傳來の當時に於ては、佛教は唐